



歯学だより Vol. 5



2010 年

岡山大学歯学部
岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 歯学系
岡山大学病院 歯科系 広報専門部会

目次

□ 学部長より		
「歯学教育の変化と大学のチャレンジ」	岡山大学歯学部長 松尾 龍二	4
□ 副病院長より		
「岡山大学病院の現在と今後」	岡山大学病院副病院長（歯科系診療担当） 佐々木 朗	5
「岡山大学病院（歯系）の教育の現状」	岡山大学病院副病院長（歯科系研究・教育担当） 森田 学	6
□ 新任教員		
「ご挨拶」	顎口腔再建外科 飯田 征二	8
「ご挨拶」	口腔微生物学分野 大原 直也	10
「ご挨拶」	歯科薬理学分野 十川 紀夫	12
「准教授着任のご挨拶」	口腔機能解剖学分野 寺山 隆司	13
「着任のご挨拶」	むし歯科 田中 久美子	14
「着任のご挨拶」	歯周病態学分野 大森 一弘	15
「着任のご挨拶」	歯周病態学分野 難波 尚子	16
「着任のご挨拶」	インプラント再生補綴学分野 大野 充昭	17
「着任のご挨拶」	口腔外科（病態系）銅前 昇平	18
「着任のご挨拶」	口腔外科（病態系）伊原木 聡一郎	19
「着任の御挨拶」	歯科矯正学分野 石原 嘉人	20
「ご挨拶」	矯正歯科 村上 隆	21
「着任のご挨拶」	特殊歯科総合治療部 第一総合診療室 村田 尚道	22
「新任教員紹介：よろしくお願い致します」	口腔病理学分野 片瀬 直樹	23
□ 転出教員		
「御挨拶」	東北大学大学院 歯学研究科 口腔器官構造学分野 市川 博之	24
「社会歯科学の発展をめざして」	神奈川歯科大学 社会歯科学講座 歯科医療社会学分野 山本 龍生	25

「広島大学に赴任して」	広島大学大学院 医歯薬学総合研究科 健康増進歯学分野	山下 明子	26
□ 海外より			
「Philadelphia 留学記」	インプラント再生補綴学分野	下野 賢吾	27
□ 留学生レポート			
「colorful life」	咬合・有床義歯補綴学分野	Ani Ratnasari	29
「“Foreign student” at Okayama University」	Department of Oral Rehabilitation and Regenerative Medicine Hara, Emilio Satoshi		30
□ 岡山歯学会優秀論文賞受賞者寄稿			
「岡山歯学会 優秀論文賞受賞に対する感謝」	インプラント再生補綴学分野	松香 芳三	31
「岡山歯学会奨励論文賞（臨床論文）を受賞して」	歯周科	曾我 賢彦	32
「英語論文執筆という名の壁」	ルーベン・カトリック大学	峯 篤史	33
「岡山歯学会 奨励論文賞を受賞して」	口腔外科（病態系）	伊原木 聡一郎	34
□ 研修医センターより			
「創造力豊かな医療人を育成する卒後臨床研修センターを目指して」	卒後臨床研修センター歯科研修部門 副部門長 総合歯科 副科長	白井 肇	35
□ 大学院生より			
「スウェーデン歯科医療現場を訪問して」	インプラント再生補綴学分野	丸濱 功太郎	37
□ 学部学生より			
「研究室配属」	岡山大学歯学部歯学科3年	堀 節代	38
□ 歯科衛生士室から			
「歯科衛生士室の活動報告」	歯科衛生士室	羽川 操	39
□ 歯科技工室から			
「過去10年間の技工室を振り返って」	<i>manufacture, coordinate and management</i> への道 歯科技工室	竹内 哲男	41
□ 診療科トピックス			
「岡山大学病院 NST 活動について」	補綴科（クラウンブリッジ）	縄稚 久美子	42
□ 編集後記			44

「歯学教育の変化と大学のチャレンジ」

岡山大学歯学部長
松尾龍二

国立大学が法人化されて6年が経過し、第一期の中期計画が終了しようとしています。法人化後に皆さんが感じたことは、恐らく「スタッフの数が減った」、「予算が減った」、挙げ句の果てに「講義をもっとやれ」、「診療収入を上げよ」、「研究がやりたければ自分で金を取ってこい」と言ったところでしょうか。確かに昨年世間を騒がせた「事業仕分け」に見られるように、世間に目立たないことや利益に直結しない部分（とくに研究）には国から予算が出てこない事態になっています。要は大学教育に対する国の予算が減ったということでもあります。

一方では、大学が本来持っている基本的な姿勢に変化はありません。一つは「大学の自治」です。大学は様々な問題を起こすことがあります。もし学位授与や患者診療における金銭の授受、また研究データのねつ造などが起こったとしても、国または文部科学省が大学に対する罰則や法律を設けようなどと言うことにはなりません。あくまで大学の自治の範囲内で対処することになります。すなわち「研究」と「教育」を大学が自由に行える配慮でもあります。大学は「研究」を行い、これを基に自由に「教育」を行う。そして独占的に「学位授与」を行うことができます。この基本的な仕組みに変わりはありません。

もし国の予算が減ったり、優秀な受験生が減ったりすると、どうなるのでしょうか。すでに米国では、大学の機能別分化が見られます。すなわち、ある大学は大学院に特化した研究センターの大学になり、また別の大学は学部教育に主体を置く大学になります。また一般教養を目指した大学さえあります。

さて我が国の歯学部ではどうでしょう。入学定員の削減については、国立大学が足並みを揃えて一律に行っています。一見して大学間には差が無いように見えます。もちろん歯科医師の養成という観点からは、一定水準の教育を行わなければなりません、各大学の予算規模や地域性を考えると、研究や教育が一律に行えるとは思えません。緩やかではありますが、米国のような機能別分化が起こる可能性があります。文部科学省が推進している「〇〇研究拠点」や「××ネットワーク」には機能別分化を見据えた魅力的な響きを感じます。すなわち研究主体と教育主体の歯学部に分け、教員をネットワークで結ぶことにすれば、最小限度の予算で効率よく歯科医師を養成しつつ、次世代のライフイノベーションを担うことができます。

地域性や大学規模は如何ともしがたい部分があります。しかし研究の推進、地域医療への貢献、国家試験の合格率などなどは、日々の努力で高めていくことができます。岡山大学歯学部がどのような道を選択するかは、それこそ「大学の自治」なのです。

平成22年3月1日

「岡山大学病院の現在と今後」

岡山大学病院副院長（歯科系診療担当）

佐々木 朗

平成 21 年 4 月より、岡山大学病院は医学部・歯学部附属病院から独立部局として改組を致しました。患者中心の高度な医療を提供するには、迅速な決定が行える組織が必要であること、医師、歯科医師を始め多職種の医療専門職員の臨床・研究、そして種々の医療系学生の卒前・卒後の教育を行う場であることなど病院機能が多角化してきているのが理由であろうと思います。医科と歯科では抱える課題は少し異なる面もありますが、岡山大学病院は時代の流れに合わせて変化してきているものと思います。

こういった変化の中で重要な位置にあるのが、将来を見据えた病院の再開発事業です。平成 21 年度の歯科系の状況をみますと、主に歯学部病棟移転後の病棟跡地の再開発が中心に進められてきました。本年度は、医学部外来棟と歯学部棟（3 階）に渡り廊下が開通し、歯科病棟跡には、精神神経科と形成外科の 2 つの医科系診療科が外来診療を開始しました。3 階に連絡通路ができたおかげで中央検査部・手術室、医科外来、入院棟、病院管理棟へのアクセスが非常に良くなり、患者の皆様のみならず職員も利便性を感じられているものと思います。歯科中央材料部の跡地には、チーム医療・キャリア室が設置されました。また 3 階の再開発工事に合わせて歯科当直室の跡地を利用して口腔外科診療室の拡大と改修を図り、特に患者のプライバシーを配慮した個室型の診察室を 2 部屋、超音波検査室、理学療法と点滴が行える部屋をそれぞれ個室化するなどの改修を行いました。診察部門と処置部門を少し分離することによって、患者の皆様に配慮した環境での病名告知や術後の管理指導など多岐にわたる口腔外科疾患患者への対応が充実するものと期待しています。また、ハード面だけではなく医科・歯科の連携も従来以上に活発化してきております。特に周術期管理センター（PERIO）の歯科部門の活動や腫瘍センターでの口腔ケアの充実、医科の患者の予後の向上に重要な役割を果たすようになってきており、医科・歯科統合病院ならではの特徴だと思います。

また大学病院では、良質の歯科医師を育てるという使命があります。岡山大学の卒後歯科臨床研修教育システムは研修センター歯科部門長である鳥井教授のご努力により、教育レベルも高く非常に好評ではありますが、研修教育の効率性やアメニティーの充実の点から、卒後歯科臨床研修センターの充実、良質な歯科医師育成には不可欠と判断を致しました。そして歯学部棟 2 階の事務部門（医事課）の医学部外来棟への移転にあわせて、その跡地に新たに歯科研修センターを平成 21 年 11 月にオープンしました。窓からの採光が十分とれる角部屋であり素晴らしい環境にあります。そして面積も大幅に拡張しました。今後、全国から多くの歯科研修医が岡山大学病院に集い、そして育てゆくものと期待しています。

平成 22 年度は、患者サービスの向上の点から、案内板や待合室チェアの全面交換、歯科外来受付の一部改修を予定しており、今後は、歯科卒後研修センター跡地や歯科臨床検査室跡地について再開発を考えています。また、病院全体構想としては岡山大学病院の核ともいえる新中央診療棟が平成 24 年には完成予定となっており、現在、基礎工事と設計等の準備が進められています。これは移植医療をはじめ最先端の医療に対応した手術室や検査部門が予定されており、手術室も増える予定です。歯科系では手術室の増加による手術の円滑化を期待しています。

このように岡山大学病院では医科系は勿論のこと歯科系も発展的に進化しています。地域医療の中核として今後も患者の皆様に良質な医療、快適なサービスが提供できるように努力してゆきたいと思っています。

「岡山大学病院（歯系）の教育の現状」

岡山大学病院副病院長（歯科系研究・教育担当）

森田 学

1. 歯科卒後臨床研修センター移転

ほとんどの方がご存知かと思いますが、歯科卒後臨床研修センターが2階に移転しました（写真）。改装直後という理由もあるせいか、以前の場所と比べたら綺麗で、日当たりもよく、一等地への移転です。森田病院長、佐々木副病院長の研修医制度に対するご理解と、鳥井教授をはじめとする教員スタッフのご努力の賜物です。教員ルームもゆとりのあるデザインになっております（右写真 奥）。妬んでいうわけではありませんが、教員の机の周りの余裕スペースは、少なくとも私の教室よりは広いと感じました。

居心地のよいことは、それ自体何ら問題ありません。ただ、あまりにも環境がよすぎると部屋に入り浸ってしまう研修医がでないと限りません。「岡山大学歯学部卒業生のみならず他大学卒業生も岡山大学病院で研修して欲しい。そして、その先は大学院を目指して欲しい。」という願いを込めての移転です。サボる研修医をつくることではありません。

ハード面が改善したのですから、次はソフト面です。歯科卒後臨床研修センターに対応を丸投げするのではなく、歯学部全体で知恵を出し合って優秀な学生を全国から集め、質の高い研修プログラムを提供しようではありませんか。



2. 卒前臨床実習の話題

小児歯科岡崎先生を中心とした臨床実施部会のもと、卒前臨床実習が進行しています。ここ数ヶ月で話題になったことをいくつか紹介します。

1) タービンヘッドのメンテナンスは学生に任されています。ところが、いつの頃からか間違ったメンテナンス方法が引き継がれ、時間だけ経過していました。結果は明らかです。一個数万円のタービンヘッドが、メンテナンスを重ねる毎に安楽死に近づいていたのです。昨今の世相を反映したまさに典型的な例です。誰か悪意を持った学生が診療室を壊そうとしているわけではありません。でも気がつく、1人ひとりが自分で決めたテリトリーに閉じこもって、表面的な仕事のやりとりはしても、お互いに余計なことには踏み込まず進んで協力し合おうとしない状況に陥っているのです。ベストセラー「不機嫌な職場 なぜ社員同士で協力できないのか」（講談社）で指摘された風景さながらです。診療室全体が感情を失っているともいえましょう。

2) 上記1)とも重なりますが、器具の破損・紛失が多発しています。老朽化が原因ならば仕方ありません。しかし、手荒な取り扱いでの破損、それを報告しない、あろうことか壊れた器具を隣のユニットの器具とこっそり交換する、等々どこまで本当か分かりませんが、いろいろな苦情が上がってきます。「壊れた器具の修理費用は学生全員で負

担させてはどうか」という過激な意見も出てきました。考えてみれば、コスト意識を勉強するのも学生にとっては案外よいかもしれません。賛成する人は少ないでしょうけれど、「感情をもった診療室」になることだけは確かです。

3) 患者情報の漏洩防止を目指し、また学部としての毅然とした態度を示す意味も込めて、守秘義務に関する署名入り誓約書を学生一人ひとりからとりました。学生を信用していないというわけでは決してありません。しかし、一度事が起こると最終責任は病院長にまで及ぶのですから、不真面目な対処は許されません。また、「学生ですらこのようにしているのだから」と、教員に対する気持ちの引き締めにもつながります。

以上、できるだけ透明性を持たせるために、現状をありのまま紹介したつもりです。私の誤解があればお知らせください。本来は、大学病院ならではの臨床研究も紹介しなくてはなりませんが、私の情報収集不足もあり今回は省略させていただきます。というか、稼動額を厳しく問われるようになってからというもの、臨床研究に対する活性が低くなったような気がします。法人化の負の部分です。関係者の皆様におかれましては、岡山大学病院の目玉となるような臨床研究を実施し、次年度の紙面が明るい話題で埋め尽くされるようにしていただきたいと思います。

「ご挨拶」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 顎口腔再建外科
飯田 征二



このたび、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 顎口腔再建外科の教授として平成21年11月1日付けをもって着任いたしました飯田征二です。中学高校と古都奈良で過ごし、昭和55年に大阪大学歯学部に入學。昭和61年に卒業し、今回の赴任まで大阪大学歯学部口腔外科学第一講座でお世話になっておりました。この教室は戦前からある医学部歯科学講座に源流がある歴史の長い教室ですが、担当させていただきまず岡山大学顎口腔再建外科がこの教室と似て歴史が長いことを知り驚いております。顎口腔再建外科学の前教室名はご存知のように第一口腔外科であり、昭和24年に国立大学に4番目に設置された歯科学講座である岡山大学医学部歯科学講座にその源流があります。本講座は途中に口腔外科学講座と改称され、岡山

大学病院の発展とともに歩み、歯学部が昭和55年に設置されて口腔外科学講座が第一ならびに第二のふたつに分かれるまで、一手に岡山大学ならびにその関連する病院での歯科・口腔外科診療を担い、中四国の歯科の中心的存在として多くの優秀な先生方を輩出してきた講座です。すなわち、岡山大学歯学部はもっとも新しい国立大学歯学部のひとつではありますが、当教室を中心に岡山大学の歯科として地域の歯科医療に貢献してきた歴史は非常に古いものです。今回、この由緒ある講座の歴史の一端を私が担うことになり、重い責任を感じておりますが、その歴史を汚さぬよう教室の運営を行ってまいりたいと思っております。

私が在籍した大阪大学の講座は、古くより口唇口蓋裂治療の体系化をめざして臨床研究を積み重ね、口蓋裂治療の先駆け的施設として名をはせており、今も脈々とその流れを継いでいる教室です。その講座にて長きに渡り、口唇口蓋裂治療の臨床ならびに研究に携わってまいりました。また、2000年の11月から8ヶ月間は文部省長期在外研究員としてドイツのハイデルベルグ大学においてCraniofacial Surgeryを学ばせていただきましたが、そこで当時脚光を浴びていたコンピュータシミュレーションあるいはナビゲーションといった現在では普通に行われるようになってきている治療システムの研究に協力させていただき、また、手術についても仮骨延長術が普及しはじめた時期でもあり、多くの症例を経験させていただきました。帰国後はこれらドイツで仕込んだ技術や考え方を顎変形症治療法、特に治療上問題点が多い口唇口蓋裂症例に導入し、より効果的な顎矯正手術方法の確立を目指してまいりました。今後、これら経験を生かし、顎口腔再建外科学および岡山大学の臨床・研究に貢献できればと思っております。歯科が医療の一部であり、特に口腔外科はその治療内容などから隣接医学領域との関係を考えながら運営しなければなりません、医学部歯学部病院統合により歯学部病院という独立性がなくなつたいま、従前以上に、協調性をもって臨床教育研究を進めていかなければなりません。特に、自分の専門とする口唇口蓋裂治療は、生下時より産科、小児科との協力より開始され（最近では胎児診断時に発見されることも多く、その場合は出生前より母親達への教育が開始されます）、また、成長以後も裂によって生じる審美、機能障害に対しても、関連する講座との理解を深め、強く連携を行って治療を行っていかねばならないのはいうまでもありません。ただ、先天的に口腔器官の一部の形成

障害を有し、それに伴う口腔機能の障害を改善するためには、どうしても口腔を中心とした系統立てた治療（いわゆる「口唇口蓋裂の一貫治療」）が必要であり、その意味で口の専門家が集まる歯学部において本疾患の治療を先導的に行えればと考えております。それゆえ、本疾患に対し、歯学部同窓会の先生方にはさらにご理解を深めていただき、本院での口唇口蓋裂治療の発展にご協力いただきますよう切に望んでおります。最後になりますが、岡山大学歯学部発展のため力を尽くす所存ですので、同窓会の先生方におかれましては、よろしくご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

「ご挨拶」

口腔微生物学分野
大原 直也



平成 21 年 7 月より、福井一博先生の後任として口腔微生物学分野を担当させていただくことになりました。

私は、1965 年に大阪市福島区で生まれ、大学入学までを大阪で過ごし、長崎大学歯学部にて 5 期生として入学しました。長崎大学歯学部は岡山大学歯学部と設置時期が同じですので、学年の進行も岡山大学と同じです。長崎大学には熱帯医学研究所（熱研）という特徴のある附置研究所が設置されており、学生の間は教養部時代よりその中の寄生虫学部門（当時青木克巳教授（現名誉教授）主催）に出入りさせていただくことができました。その経験が少なからず今に繋がっていることは否めません。寄生虫学分

野は当時もケニアの片田舎にフィールドを持っており、夏休みに約 1 カ月フィールドで過ごすという貴重な体験もしました。

さて、平成 2 年 3 月に歯学部を卒業する見込みになり、進路をどうするかということでも少なからず悩みました。臨床に携わることと考え始めましたが、ある人物との出会いがあり、基礎に進むことになりました。その人物は恩師となる山田毅先生（現名誉教授）で、長崎大学歯学部口腔細菌学講座に第 2 代目教授として、大阪大学微生物病研究所結核病理部門から着任したばかりでした。かなり強引な性格ではありましたが、人を引き付ける力があり、何度か話を聞いているうちに入局することになりました。山田先生の専門は細菌の薬剤耐性機構の分子メカニズム、結核の分子生物学でした。今では考えられないですが、学部卒直後にもかかわらず助手での採用となりました。当時おられた先生方にはしばらく指導を頂けるものと思っていたのですが、2 年過ぎた頃にはすべての先生が栄転され、気がつけば教室の中では教授の次という立場になっていました。もちろん学位も無い状態です。山田先生が着任後に山田研で研究を始めた者はすでに 10 名ほどになっていました。今から考えても相当無茶苦茶な研究室であったと思います。もう少し物事が分かっていたら逃げ出していたことでしょう。またよくここまで生き延びることができたと思います。そんなことから後輩（当時の学生諸君を含め）にもかなり迷惑をかけたことだと反省しています。

研究テーマについてですが、このようにカリスマ性の高い教授のもとですので、歯学部とはいえ当然のごとく結核・BCG ワクチンをはじめとする抗酸菌の分子生物学的解析が大半でありました。

山田先生が着任したのが、54 歳でしたので、約 10 年後には退官し、教授選考の運びとなります。教室で在籍年数が最長の私としては手を上げざるを得ず、当時 35 歳で出馬しましたが、経験不足の一言で終わり、現在の教授である中山浩次先生を九州大学から迎えることになりました。中山先生は歯周病原細菌の *Porphyromonas gingivalis* の分子生物学を専門としており、口腔細菌学分野の中では世界をリードしている研究者のひとりです。中山先生には平成 19 年 1 月までの間、歯周病原細菌についてみっちり教えていただき、結果的に私自身たいへん得をしたと思っています。またこの間に細菌感染症と骨破壊との関係についても中山先生と研究を進めることができ、興味深い結果をいくつか得ることができました。

これまで細菌学、特に細菌そのものの解析を中心に研究を行ってきましたので、宿主側のことも学びたいと思い、そうであればいっそうのこと感染症ということと離れ、細胞生物学を学ぼうと考えました。幸い文部省在外研究員として米国国立衛生研究所癌研究所（NIH/NCI）の三木徹博士のもとで、細胞分裂の最後のステップ細胞質分裂とシグナル伝達の研究に従事する機会を得ました。その時最もお世話になったのが、上条桂樹先生（現東北大学大学院医学研究科准教授）で、細胞の取り扱いはもちろん顕微鏡の取り扱いをみっちりと教育していただきました。全く掛け離れたように見える分野ですが、いずれも我々の体を研究対象としていますので、深いところでは繋がっています。どう繋がっているかについては今後の研究を通じて紹介していきたいと思っています。

平成19年2月に転機を迎えます。東京都新宿区にある国立感染症研究所（感染研）免疫部の小林和夫部長から、感染研に来ないかと声を掛けていただき、免疫部第四室長として赴任することとしました。厚生労働省本省直轄の研究所であり、良くも悪くも国の中心的な役割を果たす研究機関のひとつです。昨今の新型インフルエンザの対応でお分かりいただけるでしょう。大学とは全く異なる運営方法をとっており、ここで過ごした2年4カ月は貴重な経験となりました。

2年でセットアップをようやく終えたところでしたが、縁あり、岡山大学にお世話になることにしました。長々とこれまでの経緯を述べましたが、良く言えば色々な経験をさせていただいたこととなります。ここまで来ることができたのも、これまでに出会った多くの方の助けがあったからだと思います。研究対象あるいは分野を頻繁に変えることは研究者の個性という点から見ても、お勧めできるものではありませんが、私の場合にはこれまでの多様な経験を生かして、他の方に少しでも役に立つことができれば良いと考えております。最近の傾向としては短期間での成果が求められ、またトランスレーショナルリサーチに代表されるような目に見える形の結果が要求される傾向にあります。もちろんこのような研究も重要であり、できる限り行っていきたいと考えています。ところで、歯学医学領域の基礎研究の醍醐味は、すぐに臨床に役立つということは見えないが、長い目で見れば多くの人の健康・保健にインパクトのある結果を残すということにあると思います。哲学的な理解し難い表現で恐縮ですが、感染症分野は特にそういった内容の結果を残しやすい領域だと思いますので、地道な基礎研究にも取り組んでいきたいと考えています。

ここまで教育には触れてきませんでしたが、関連領域の研究を推進していくことで、良い教育にも反映されるのだと思います。その精神のもと今後の教育・研究を始め、さまざまな業務に取り組んで行きたいと考えています。皆様のご指導・ご鞭撻並びにご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

「ご挨拶」

歯科薬理学分野
十川 紀夫



この度、平成 20 年 4 月 1 日付けで准教授に昇任致しました。今回、補綴科（咬合・義歯）の洲脇道弘先生のご紹介により、この「歯学だより」でご挨拶できる機会を与えていただきました。この場をお借りし、関係の諸先生方に深く感謝申し上げます。

思えば、『人類は、歴史的に疾病に対する最終的手段として薬物を用いる努力を続けてきた。薬を制する者は医療を制す。』との勝手な思い込みから、大学院生として歯科薬理学講座（当時）初代教授 古田裕昭先生の下で勉強を始めてから、はや 20 数年が経ってしまいました。途中、「遺伝子治療」なるものが出現し、“医療を制するのは薬ではなく遺伝子か？”と、気の迷いが生じた時もありましたが、最近、かの iPS

細胞(induced pluripotent stem cell)も遺伝子導入だけでなく、該当遺伝子を全て化学物質に置き換えても作成しうるとの研究成果を聞き、“やはり、薬物だ！”と、却って意を強くして薬理学の勉強に励んでおります。私は、もともと“腫瘍”に関する仕事やりたくて大学院に入ったのですが、当時、歯科薬理学講座はヒスタミンやポリアミンなど生体アミンの生理機能について研究しており、「細胞増殖におけるヒスタミンの役割の解明」とのテーマをいただき研究をスタートさせたのが、ヒスタミンとの出会いでした。現在、研究対象は“摂食”に変わりましたが、未だヒスタミンとの縁は切れず、ヒスタミン受容体（特に H3 受容体）が関わるモノアミントランスポーターの制御機構を、トランスポーターの発現および機能の両面から検討しております。（ノルアドレナリンなどのモノアミンは脳の中で摂食に関与しており、トランスポーターはそれらモノアミンを作用部位から除去する掃除機と言えます。）

さて、私的な紹介はこれくらいにして所属分野についても少し紹介させていただきたいと思います。歯科薬理学分野では現在、2 代目となる北山滋雄教授の指導のもと、教室員一同がこれまで以上に教育に研究にと情熱を傾けて取り組んでいます。（それがためか、最近、「薬理は厳しい！」との声が学生から漏れ聞かれるようではありますが・・・。）研究テーマは『神経伝達物質トランスポーター』を中心として構成されており、疼痛や摂食など、歯科・口腔領域に関連の深い疾患に対する新しい薬物療法の基盤の確立と、その基盤に基づく新規薬物の開発を目指しております。“面白い”と思える研究成果も着々と積み上がってきており、ダイヤモンドかプラチナかと思えるような鉱脈（お宝テーマ）がそこかしこに散見されるようになってきました。あとはただ目標に到達するまで掘り進めるだけなのですが、いかんせん、歯科薬理学分野は伝統的に教室員が皆、シャイで宣伝力に欠けるため絶対的にマンパワーが不足しております。当分野の研究に興味のある方は、老若男女を問わず受け付けておりますので、是非、ご連絡下さい。（参考 URL: http://www.dent.okayama-u.ac.jp/yakuri/index_sc_j.html）

最後になりましたが、私も本学部卒業生の末席に名を連ねる者として、その自覚を新たにするとともに、職位の責任を鑑み、これからもより一層、教育と研究に努力、精進していく所存ですので、今後とも皆様のご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

「准教授着任のご挨拶」

口腔機能解剖学分野
寺山 隆司



2009 年 9 月より、市川博之先生（現 東北大学教授）の後任として口腔機能解剖学分野の准教授に任命されましたのでご挨拶申し上げます。今回このような挨拶をさせて頂く機会を与えていただきました皆様に感謝申し上げます。

私は、1993 年に九州歯科大学を卒業後、宮崎医科大学医学部付属病院（現 宮崎大学医学部）歯科口腔外科での研修を経て、同大学大学院医学研究科博士課程入学、

1998 年に学位を取得しました。以後、宮崎医科大学医学部付属病院医員（歯科口腔外科）、2001 年 7 月から旭川医科大学解剖学第一講座助手、2005 年 4 月から岡山大学大学院医歯薬学総合研究科口腔機能解剖学分野助手（2007 年より助教）を経て、このたび同分野の准教授に任命されました。宮崎医科大学に所属していた時期の 1998 年 9 月～2001 年 3 月まで、米国メリーランド州立大学で Ronald Dubner 教授のもとでポストドクトラルフェローとして研究に従事しました。大学卒業当初は口腔外科を志していたわけですが、留学が契機となって基礎研究と解剖学教育に従事することとなり現在に至っております。

本学で担当している授業は、「細胞生物学」、「歯の構造」、「脳の解剖学実習」、「人体解剖学実習」などです。今年度から担当させていただいた科目もあり、教育の難しさと責任を日々感じているところです。臨床科目を履修する際にも十分に対応できるような講義内容を心掛けているつもりですが、至らない点多々あると思いますので、特に臨床系の先生方からのご意見をいただけると幸いに存じます。

研究に関しては、大学院在籍中から現在に至るまで神経系の研究を中心に行ってきました。中でも最近特に興味を持っている分野はグリア細胞の役割に関する研究で、旭川ではオリゴデンドロサイト、そして岡山に来てからはミクログリアやアストログリアに関する研究を行ってきました。グリア細胞といえば従来、神経系における支持細胞といわれ、ニューロンの機能を補助する脇役的な存在であるに過ぎないといわれていました。それが近年、神経系における情報伝達においても積極的に関与し、グリア細胞がむしろニューロンの機能を支配しているとも考えられるようになってきました。またミクログリアは神経組織内の他の細胞成分とは異なり、骨髄由来の単核細胞の前駆細胞が血液脳関門が不完全な間に脳内に進入して、そこで成熟を遂げたものと考えられていて、主に神経組織内の免疫機能に関与しています。

私もこのグリア細胞のように、目立たないながらも自分に与えられた仕事を黙々と行い、その結果、世間にも認められるような成果を出していくよう努力していきたいと考えております。また、こじ付けついではありますが、北九州・宮崎・旭川・アメリカと必要とされる場所に（必要とされない場所にも？）遊走して、この岡山大学（中枢神経系）に辿り着き、ここで少し成熟したと自分で勝手に思っている私ですが、他大学出身（骨髄由来）でありながらも岡山大学の機能維持に少しでも貢献できるよう日々精進していく所存ですので今後とも御指導賜りますようよろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

むし歯科
田中久美子



岡山大学の皆様、こんにちは。20期生の田中久美子です。平成21年4月より岡山大学病院 むし歯科の助教に着任いたしました。大学院を卒業してすぐに助教に採用され、当病院・大学院の多くの助教の先生がたとは比べ物にならないほどのヒヨッコです。

私が岡山大学を卒業した平成17年は、研修医制度が必

修化に切り替わる前の最後の年でした。そのため、卒業後は開業医に就職、岡山大学あるいは他大学の診療科に大学院生もしくは研修医として入局する、大学院の基礎の講座で研究をする、など、同期の進路はさまざまでした。いろんな選択肢があるなか、私は歯科材料の世界に興味を持ち、歯科保存修復学分野に大学院生として入局しました。20期生は大学卒業後も岡山大学病院・大学院に残る人が多く、学内で同期と顔を合わす機会が多かったことは、私の大学院生活の励みでした。

大学院では、メガボンドやトライエスボンド、G-ボンドなどを用いて歯科用接着材の研究をしました。この研究により、実際に臨床で使用する接着材を、自分のデータと知識を持って選択し、応用しています。大学院4年間の大きな財産だと感じています。

現在、教官として基礎実習と臨床実習に参加しています。ひとつひとつの作業や考え方を、まずは基本に忠実に行うことを学生に伝えられたら、と思います。また、私自身、助教として成長できるよう、視野を広く持って日々努力しようと思っています。

末筆になりましたが、みなさまにおかれましては、今後ともこれまで同様、ご指導、ご鞭撻いただきますようお願いいたします。

「着任のご挨拶」

歯周病態学分野
大森一弘



平成 21 年 4 月 1 日付で歯周病態学分野の助教に採用されました 16 期生の大森一弘です。今後ともご指導を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成 13 年 3 月に岡山大学歯学部を卒業し、当時の歯科保存学第二講座に大学院医歯学総合研究科大学院生(1 期生)として入局しました。大学院生時代は、糖尿病患者における慢性炎症悪化の病態メカニズムに興味をもち、歯周組織を構築する

歯肉線維芽細胞に高血糖状態が及ぼす影響を研究してきました。大学院 4 年目の時、縁あって米国ボストン大学歯学部歯周病学・口腔生物学講座の Prof. Thomas E. Van Dyke 先生の研究室に留学させていただきました。「Resolution of Inflammation」という研究テーマのもと、20 代後半から 30 代前半にわたる青春の真っ直中、自由な研究生活を送った次第です。ボストンでは、街柄でもある世界各国から集まった同世代の研究者、学生達との交流を中心にラボとバーを行き来する日々が続きました。その結果、日本に帰国した現在も国内外を問わずに交流できるチャンスをもたらえたことが自分にとって一生の宝となっています。先日、ボストンで開催されたアメリカ歯周病学会に参加した際にも、旧友達との再会を満喫した次第です。

ボストンでの気ままな研究生活に別れを告げ、平成 20 年 4 月から 1 年間、ハンセン病療養施設の一つである国立療養所大島青松園に厚生労働技官として勤務し、高齢者医療に携わる機会に恵まれました。瀬戸内の小島である大島へは政府官用船「せいしょう」に乗船し、人生初の船通勤という貴重な経験をしました。また、超高齢化社会のモデルともいえる施設での歯科医療の展開は、しばらく診療から離れていた自分にとって衝撃的なものでした。現在注目されている多職種連携のチーム医療に参加できたことも、大学病院での診療を行う上で非常に役立っております。

そして、5 年ぶりに大学へ戻ってまいりましたが、「臨床・研究・教育」の三本柱の一つ一つを自分なりに模索しながら少しずつ貢献できればと考えております。最後に、「品位と威厳」をもった歯科医療および教育を提供できるよう努力する所存ですので、ご助言いただければ幸いです。

「着任のご挨拶」

歯周病態学分野
難波 尚子

このたび私は、2009年11月1日をもちまして岡山大学大学院医歯薬学総合研究科特別契約職員（助教）に着任いたしましたので、ご挨拶申し上げます。今後3年間（すでに初年度はもう終わりかけていますが・・・）、特任助教として奮闘する予定です。今回、私が特任助教に着任した経緯について書かせていただこうと思います。

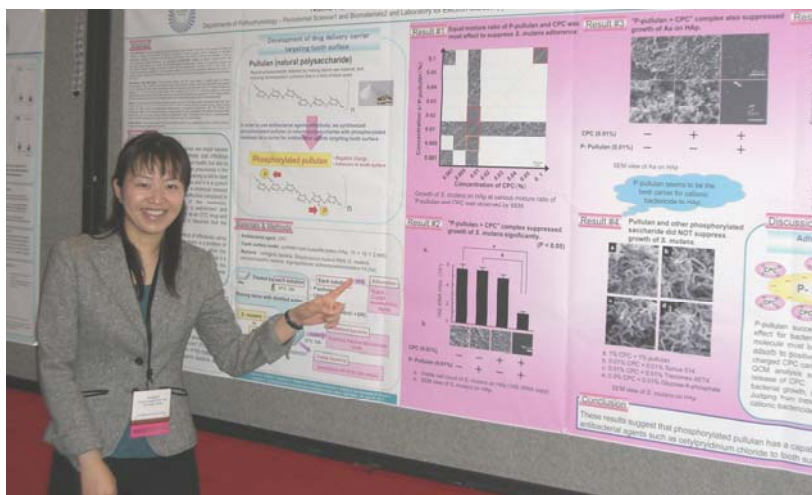
私は2005年に岡山大学歯学部を卒業後、歯周病態学分野の大学院に進学し、生体材料学分野の鈴木教授、吉田准教授と歯周病態学分野の高柴教授に研究のご指導を受け、2009年に学位を取得しました。その後、レジデントとして岡山大学病院へ勤務しておりましたが、昨夏に応募したJST「若手研究者ベンチャー創出推進事業」に採択されたことから特任助教となりました。

私は、大学院時代から硬組織を標的としたドラッグデリバリーシステムの研究を行ってまいりました。既存の抗菌剤を、新規の担体を用いて歯面や骨へとデリバリーするので、感染制御の一助として用いることを想定しています。今回採択された事業では、要介護者向けの口腔ケア剤の開発とその製品化を目指しており、ベンチャー起業に向けて研究開発とマネジメント業務（市場調査・特許調査・起業戦略など）を行っていきます。

研究を始めた当初は、生体材料学と歯周病態学の共同というあまり例のない組み合わせでのスタートでしたが、研究の成果を社会に還元するためのステップに一歩近づき、とても嬉しく思います。

現在は、右も左もわからない状況の中、様々な方のご支援を賜り、何とか前進しております。

末筆ながら、今後とも一層のご指導とご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



「着任のご挨拶」

インプラント再生補綴学分野
大野 充昭

2009 年 10 月よりインプラント再生補綴学分野でお世話になっている大野です。アメリカは東海岸、ワシントン DC 近郊にある National Institutes of Health (NIH) での約二年半の留学を終え帰ってきました。私は口腔生化学分野の滝川教授、インプラント再生補綴学分野の窪木教授のもとで学位を取り、その直後の 2007 年 4 月よりアメリカの National Institute of Dental and Craniofacial Research (NIDCR) / NIH の Marian F. Young の

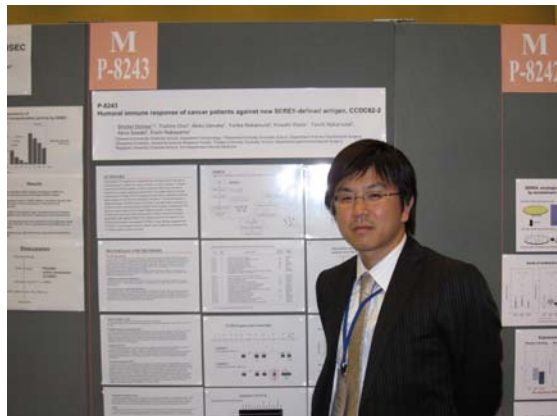


ラボへ行っていました。” Bone and Teeth” のラボに所属し、トランスジェニックマウス、ノックアウトマウスの作製、解析を行い、日本ではなかなか経験のできないよい経験をさせて頂きました。アメリカではボスから研究の方法、手技、考え方だけではなく、人生の楽しみ方を学ばさせて頂きました。『あなたは日本でどのような生活をしていたの?』と質問され、『朝 9 時に大学に行き、夜中の 2-3 時ぐらいまで働き、朝 5 時まで飲む生活をしていた。』と答えると『No way !! あなたは今アメリカにいるのだから私がアメリカ人らしい生活を教えてあげる。』と言われ、私の楽しく、そしてエキサイティングな留学生活が始まりました。ある日は朝 9 時にラボに行き、夕方 6 時に Happy hour (Bar) へ。またある日は朝 5 時にラボに行き、お昼 3 時にはゴルフ場に。そして旅行三昧。研究が進んでいれば何も言われぬすばらしい環境で、自分自身の時間を自分でコントロールできる、私にとって居心地よく一生ここにいたいと思わせる場所でした。しかし、私は彼女から多くの刺激も与えて頂きました。英語が大の苦手な私に NIH 内外で多くの発表をさせて頂きました。中でも、2008 年 IADR (国際歯科学会) では Oral Presentation と Chairman を、2009 年 ASBMR (アメリカ骨代謝学会) においても Oral Presentation をし、今までに味わったことのない刺激的な瞬間であり、終わった後の達成感は今でも忘れられません。またありがたいことに ASBMR では Young Investigator Award を頂き、2 年半の研究が少し実った気がしました。後は、投稿している論文がアクセプトされるのを願うだけです。現在は、特任助教のため臨床講座にしながら臨床のできない私ですが、新しい発見に飢え日々 8F で研究を行っています。

最後に、NIDCR のラボの人々から帰国の際に頂いたすばらしい言葉があります。『岡山大学歯学部からくるポスドクは他大学からくるポスドクよりすばらしい人格者であり、すばらしい研究者であった。』です。NIDCR には岡山大学歯学部から多くの諸先輩方が留学されており、これは諸先輩方がすばらしかったから頂けたお言葉で、私は岡山大学歯学部を誇りに思いました。そして今でも思っています。今後は、岡山大学ですばらしい研究、臨床を続けられればと思っています。長々と書きましたが、皆様今後ともよろしくお願いいたします。

「着任のご挨拶」

口腔外科（病態系）
銅前 昇平



この度、平成22年1月より口腔顎顔面外科学分野、助教に任命されました銅前（どうまえ）と申します。

長崎大学を卒業後、岡山大学2口外研修医、関連病院勤務を経て、帰局した平成16年度からは岡山大学大学院医歯薬学総合研究科、免疫学教室（中山睿一教授）にて、口腔癌におけるがん抗原発現解析、新規がん抗原の同定と解析に関する研究をさせていただきました。当時、免疫学教室ではがん免疫療法の臨床研究（第一相試

験）が開始された直後であり、岡山大学（外科、内科、小児科、泌尿器科、皮膚科など）、大阪大学などの臨床系の先生方も多く教室に在籍され、設備、研究費などの面も含めて、非常に恵まれた環境で研究をさせていただけたことは幸運でした。口腔癌サンプルを用いたがん抗原発現解析の結果、残念ながら口腔外科の患者さまを臨床試験にエントリーすることはできませんでしたが、その後新たに取り組んだ新規がん抗原の同定に関する論文が *International Journal of Cancer* に掲載され、学位論文とさせていただくことができました。今後は現在の基礎研究に加え、何とか条件を整えて、臨床試験に是非チャレンジしたいと考えています。

臨床では、昨年日本口腔外科学会専修医を取得いたしました。今後まずはその上の専門医取得を目指して日々研鑽を積み、得た知識、技術を教育にも役立てていきたいと考えております。

まだまだ未熟者ですので、今後とも皆様の御指導、御鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

口腔外科（病態系）
伊原木聰一郎

2010 年 2 月 1 日付けで岡山大学病院・口腔外科(病態系)の助教に着任いたしました伊原木聰一郎です。

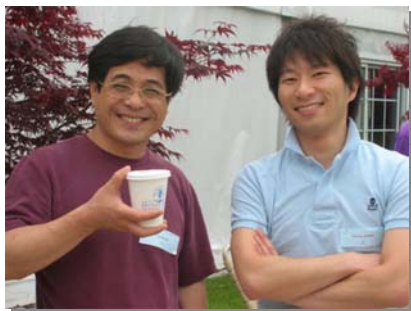
ご挨拶を兼ねまして簡単に自己紹介をさせていただきたいと思います。私は 2003 年に岡山大学歯学部を卒業後、岡山大学大学院・医歯学総合研究科・病態制御科学に進学しました。大学院では、乳癌の骨転移における Matrix metalloproteinase-13 (MMP-13) の役割について研究を行いました。

博士（歯学）の学位を取得後、2007 年 5 月からアメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン市のハーバード大学・医学部・病理学講座・Hu 研究室で博士研究員として研究を行いました。主たる研究テーマは前立腺癌の進展における血管新生因子 Angiogenin の役割についてでした。また Angiogenin ノックアウトマウスの作製も行いました。



2007 年 3 月に帰国し、4 月 1 日から岡山大学病院・口腔外科(病態系)の医員に、2010 年 2 月 1 日からは医員を退職し、助教に着任しております。

最後になりましたが、日々精進していく所存でございますので今後とも御指導を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。



Hu 先生（左）と私（右）

「着任の御挨拶」

歯科矯正学分野
石原 嘉人



2009年7月1日より、大学院医歯薬学総合研究科 歯科矯正学分野の助教に任命され着任いたしました。私は、2004年に岡山大学歯学部を19期生として卒業の後、大学院生として岡山大学大学院医歯薬学総合研究科顎顔面口腔矯正学分野へ入局し、研究および矯正歯科臨床を学ばせて頂きました。2008年の3月に博士課程を修了した後は、岡山大学病院矯正歯科にて引き続き矯正歯科臨床に従事し、現在に至っております。

着任から既にある程度の時間が経過しておりますが、一番大きな変化と言え、**「臨床」「研究」に加えて「教育」というこれまでに無かった分野が加わったこと**です。レポートチェックやディスカッション、技工など**「近い将来に歯科医師となる学生達へ、少しでも役立つ事を教えたい」と試行錯誤の日々が続いております**。昨今の学部生や大学院生は、物事に対する理解が早く、豊富な知識を持ち合わせております。（部活とバイトとお酒を飲む事に勤しんでばかりで、一診では怒られっぱなしだった自分の学生時代が恥ずかしくなるばかりです。）そんな学生達と接する機会が増え、新鮮な発想に触れたり、新たな発見をさせてもらったりと逆に**「教わっている」**現状です。

研究に関しては、生きた細胞内で起こる現象をリアルタイムで捉えるライブイメージングという手法の応用に着手しながら、大学院時代からのテーマである**「骨系細胞の機能」**の研究に加え、**「歯の移動に関わる細胞動態」**に関する研究を始めました。学部生時代の将来像には全くなかった**「研究」**ですが、日々の歯科臨床とはまた違った面白さがあると最近感じる次第です。

今後は、これまで多くの方々から受けてきた知識や技術、経験を、微力ではありますが、後輩達や大学、そして社会へ還元出来るよう研鑽を重ねていきたいと思っております。これからも御指導・御鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

「ご挨拶」

矯正歯科
村上隆

一昨年12月1日付けで矯正歯科の助教に任命いただきました村上隆です。着任して一年以上となりましたが、遅ればせながらこの場をお借りしましてご挨拶申し上げます。私は岡山大学歯学部を平成15年に卒業後（18期生）、顎顔面口腔矯正学分野（現矯正歯科学分野）に大学院生として入局させていただきました。大学院時代には、顎顔面骨格の再生医療に向けた軟骨分化決定因子に関わる研究に加え、矯正歯科臨床も学び、充実した大学院生活を送ることができました。現在、これまでの「研究」「臨床」に加え、「教育」にも携わらせていただき、新たな発見の連続と共に忙しく楽しい毎日を過ごしております。



研究面では、大学院時代に新規同定した軟骨分化因子の機能解析を進める傍ら、新たに歯の移動時における痛みや骨代謝反応の制御に関する研究を開始しました。

臨床面においては、当科で先進的に取り組んできたインプラント矯正に携わり、より良い治療成果、新たな治療法の確立を目指して日々奮闘しております。また、より高度な包括的医療を提供するため、

他科との連携の強化にも力を入れていきたいと考えているところです。患者さんに対しては、これまで同様「診させてもらっている」という気持ちでやっていこうと思います。

最後に教育面ですが、卒前教育として臨床予備実習、チュートリアル、講座配属研究等を担当させていただいております。さらに卒後教育として、矯正歯科において専門医養成プログラムを作成・実施し、後進の教育に力を注いでいます。

以上、この一年間忙しく過ごさせていただきましたが、新たに教育というものの難しさを痛感させられる一年でもありました。特に、教える側と教わる側で意識や姿勢のギャップが存在し、うまくいかないことが多かったのを記憶しております。周囲には迷惑ばかりかけたと反省する次第です。しかし、教えるということを通じて新たに学ぶことが多く、このような機会を与えていただいたことに大変感謝しております。若輩もので至らぬ点ばかりではございますが、これまで岡山大学で学ばせていただいた経緯もあり、何か一つでもお返しできればという思いで、これからも日々努力していく所存です。また、このことが社会への還元につながることを願い、末筆となりましたが、今後とも皆様のご指導・ご鞭撻の程、よろしくお願い申し上げます。

「着任のご挨拶」

特殊歯科総合治療部 第一総合診療室
村田 尚道

この度、2009年4月より岡山大学病院 特殊歯科総合治療部の助教として新任いたしました。岡山大学歯学部の皆様、よろしくお願いいたします。

2001年に岡山大学歯学部を卒業後、昭和大学歯学研究科に大学院として進み、向井美恵教授の下で摂食・嚥下リハビリテーションの基礎を学びました。修了後は、そのまま教員として研究・臨床・教育に携わってまいりました。

私の卒業時は、摂食・嚥下リハビリテーション外来を歯学部で行っているのは2か所位で、言葉を聞いても、“??”と何をするのか分からない状態でした。その後、社会の高齢化が進み、要介護高齢者や誤嚥・窒息といったキーワードがトピックを浴びるようになり、摂食・嚥下リハビリテーションの分野も広がっていったと思います。



村田 富田先生 向井教授 教授夫人
(2006年 IADHにて)

8年ぶりに母校に戻り、診療システムや病棟往診など、学生時代とは全く違った環境に戸惑いましたが、診療室のスタッフに頼りながら何とか1年が経過しようとしています。岡山大学病院は、急性期病院の中で歯科が中心となって摂食・嚥下リハビリテーションを実施している数少ない病院だと思います。この1年間で、病棟からの紹介も多く、今後、更なる必要性を感じております。また、地域ネットワークの作成へとつなげていくことを考えると、診断・評価の精度の向上や効果的なリハビリテーション手法の開発など、やるべきことは幾らでもあると感じました。今後は、これまでの経験・知識を後輩へと伝えると共に、臨床・研究・教育に一歩ずつ取り組んでいこうと思います。

最後になりましたが、学内のシステムについて、不慣れ・不勉強な事が多く、諸先生方にご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、今後とも、ご指導賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

「新任教員紹介：よろしくお願い致します」

口腔病理学分野
片瀬 直樹



平成 21 年 7 月 1 日付けをもちまして、口腔病理学分野の助教に採用されました。

まずは永井教之名誉教授、長塚仁教授をはじめ、学部・大学院在学時を通じて数々の御指導・御高配を賜りました先生方に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

私は平成 17 年に岡山大学を 20 期生として卒業、平成 21 年に大学院医歯薬学総合研究科を修了しました。大学入学時は開業医を目指しておりましたが、進級するにつれ自分の歯科医師としての適正に悩み、学生生活は順調とは言えなかったように思います。しかし、3 年次に履修した口腔病理学に強く興味を惹かれたことが転機となり、卒業後は研究の道に進むことを決心しました。大学院入学後は長塚先生、病理部の柳井広之先生に病理診断の手ほどきを受け、外

科病理学の世界の虜となりました。毎日全ての標本を検鏡し、所見をとるのは大変でしたが、病理診断の面白さに触れることができ、とても楽しいものでした。歯科医師としては満足な活動ができなくても、自分の特性を活かして社会貢献ができるという経験は、私にとって大きな自信となり人生観が変わる思いでした。今でも「どのような症例でも、標本の向こうには不安に思っている患者さんがいる」ということを忘れずに、口腔病理専門医を目指して努力を重ねております。研究に関しては、大学院在籍時から「口腔癌における癌抑制遺伝子の解析」を主なテーマに実験を行っています。大学院では先輩も同級生も留学生ばかりで、実験や教室内での発表・討論を英語で行う必要があり、さながら日本にいながらにして留学をしているようでした。英語での発表が苦にならなかったこと、様々な国籍の人とともに切磋琢磨し、国際感覚を身につけることができたことも大変よい経験となりました。

能力的にも経験的にもまだまだ不足な点が多々あるかと思いますが、大学・大学院で得た経験をもとに、病理診断、研究、教育に精進する所存です。

今後とも御指導・御鞭撻を賜りますよう宜しくお願い申し上げます。

「御挨拶」

東北大学大学院歯学研究科口腔器官構造学分野
市川 博之

平成 21 年 7 月 1 日より東北大学大学院歯学研究科口腔器官構造学分野教授に菊地正嘉先生（現東北大学名誉教授）の後任として就任いたしました市川 博之です。岡山大学歯学部、医歯薬学総合研究科では口腔機能解剖学講座の杉本教授をはじめ多くの皆様に大変お世話になりました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

私は昭和 32 年に兵庫県姫路市で生まれ、大阪大学歯学部そして歯学研究科博士課程へ進学後、口腔解剖学第一講座で助手と歯の解剖学・口腔組織学・口腔発生学を分担しました。平成 4 年に岡山大学歯学部口腔解剖学第二講座（現口腔機能解剖学分野）の杉本先生の下に助教授として転任し、肉眼解剖学の講義や実習を 17 年間担当或いは分担させていただきました。現在、東北大学歯学部でも岡山大学での解剖実習や講義の経験をも十分に生かして肉眼解剖学を担当しております。

こちらに参りましてから、多くの方々から東北人と関西人の違いを指摘されています。東北人は「おとなしい。」「我慢強い。」「思ってもすぐに口には出さない。」等、一方、関西の人は「思っていることをすぐに話す。」「あまり遠慮がない。」などだそうです。私自身は全くこういったことを意識してはいないのですが、東北の方々の温かい心は日々感じています。誰に道を聞いても親切に教えていただけますし、どのタクシーに乗っても乗務員の方は大変丁寧です。大学でも、いろいろな方々から親切に接していただいています。口腔器官構造学分野の教室におきましても二人の助教（鈴木敏彦助教、清水良央助教）や大学院非常勤講師（狩野充博先生）、技術職員（貴田勝彦非常勤職員、木下省吾職員）の方々も、関西人の私にずいぶん気を使って下さっているようです。そして皆で、協力しながら楽しく教育、研究、教室運営を行っております。

仙台での楽しみの一つは海の幸です。こちらではスーパーマーケットには何時でも新鮮な海産物が並んでいます。近くの漁港で捕れたまぐろの刺身などが大変安価に手に入ります。ただ牡蠣については时期的なこともあるかもしれませんが、日生のものの方が大ぶりで味もしっかりしていたように思います。また、仙台では毎週のようにお祭りが催されます。こちらに家族を連れてきた時は、ちょうど七夕祭りでした。それ以降、どこかで必ずと言っていい程、週末にお祭りをしています。現在（12月中旬）は「光のページェント」で数多くの木々や建物がライトアップされ、街は幻想的な雰囲気です。

皆様も仙台にお越しの際は是非一声おかけください。少しでも皆様をおもてなしできるようにおいしいお店を探したり、観光地を予習しておきたいと思います。最後になりましたが、この度の原稿を依頼して下さった編集委員の先生方にも厚く御礼申し上げます。

平成 21 年 12 月 18 日

「社会歯科学の発展をめざして」

神奈川歯科大学 社会歯科学講座 歯科医療社会学分野
山本龍生

岡山大学歯学部の皆様におかれましては、ますますご健勝のこととお慶び申し上げます。私は2009（平成21）年4月に岡山大学を退職し、神奈川歯科大学社会歯科学講座歯科医療社会学分野の講師として採用されました。

神奈川歯科大学は、1910（明治43）年に日本で初めて婦人歯科医師を養成するために設立された、東京女子歯科医学校が前身です。現在の神奈川歯科大学は、1964（昭和39）年に開設されました。

歯科医療社会学分野は、2004（平成16）年に開設された新しい分野です。現在、平田幸夫教授をはじめ、助教が2名、秘書が1名で、私を合わせて5名が常勤の職員です。社会歯科学を掲げている分野（講座・教室）をもつ大学は、今のところ東京歯科大学、日本大学、そして神奈川歯科大学の3校です。近年、社会の要請等により、歯科医師国家試験の出題範囲に社会歯科学に関する項目が追加されたことも、社会歯科学を掲げる分野開設の一因と思います。

講義は主に1年生と3年生を担当しています。歯科医療の関係法規、社会保障、医療倫理、歯科医療管理などが中心です。

研究は、岡山大学の頃の動物実験・臨床研究から、疫学研究の方にシフトしています。特に社会疫学について勉強しています。関東地方は交通の便がよく、多くの学会・研究会が開催されています。それらに参加する機会が増えました。

私が社会歯科学に興味を持ったのは、岡山大学の予防歯科で日々、診療をしている時でした。予防歯科では、う蝕や歯周病になった場合でも、歯を失うことなく長期間にわたって管理できることを多くの患者さんから学びました。しかし、私ひとりがいくら頑張っても、この恩恵を受けられるのは目の前の患者さんだけです。1人でも多くの国民が健康な口腔を保つには、歯科を取り巻く社会のシステムを理解し、それを変えていくことが必要であると感じました。そのためには、社会歯科学の知識と方法論を習得しなければなりません。

中国に、「上医は国を医し、中医は民を医し、下医は病を医す」という言葉があるそうです。今までは、病を医すことに一生懸命でした。これからは、民や国を医すことも目標にして、教育と研究に頑張りたいと思います。

神奈川歯科大学のある横須賀市は、米軍の基地があって外国人が多いせいか、異国情緒のあるまちです。実は大学と米軍の基地は隣同士です。米軍の基地は、旧大日本帝国海軍の基地を転用して使用しているそうです。大学のキャンパスは、旧帝国海軍兵学校の跡地を使用しており、当時の桜並木がそのまま保存されています。ここは知る人ぞ知る、横須賀の隠れたお花見の名所だそうです。近くに来られた時には声をかけていただけたらと思います。

最後になりましたが、岡山大学歯学部の出身者の一人として、岡山大学歯学部のますますの発展を祈っております。また、何かのお役にたてればと思っています。

「広島大学に赴任して」

広島大学大学院医歯薬学総合研究科
健康増進歯学分野
山下明子

岡山大学歯学部の方々に、ますます御健勝のこととお慶び申し上げます。

平成 20 年 4 月から広島大学の助教として着任しております、山下明子と申します。私は、平成 17 年に岡山大学歯学部を卒業後、歯周病態学分野の院生として在籍し、歯周病学、歯科保存学に関わる臨床、研究を学ばせて頂きました。岡山大学在籍中は、歯周病態学の高柴教授をはじめ、たくさんの先生方に熱心にご指導いただきまして大変感謝しております。この誌面をお借りして厚く御礼申し上げます。

私が現在所属しております、広島大学大学院医歯薬学総合研究科 健康増進歯学分野は、外部の方には教室名だけでは何をしている所か謎に思われる事が多いです。これを読んで頂いている方の中にはご存知の方もいらっしゃると思いますが、当分野は以前の保存修復学の教室を母体としており、加えて国民の健康増進および健康長寿の達成に寄与するような歯科医療・歯科医学の開発を目指した学問を展開する分野として数年前に創設されました。ですので、教育は保存修復系が主ですが、診療は歯科保存診療科という科名の下、保存系の治療全般を行っています。

研究に関しては、私は大学院生時代に糖尿病と歯周病の関連を主なテーマとしておりましたので、それらを発展させるべく大学院生の先生達と共に研究に取り組んでおります。そして教室全体としては、歯髄炎抑制関連、歯牙の発生に関して、全身疾患と炎症制御に関する研究など各々取り組んでいます。

まだまだ未熟者で、悪戦苦闘の毎日を送っておりますが、日々精進してゆく所存でございます。今後とも一層のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。末筆ながら、岡山大学病院の皆さまの益々のご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。

「Philadelphia 留学記」

下野賢吾

私は現在、米国 Pennsylvania 州の Philadelphia にある Tomas Jefferson University の Department of Orthopaedic Surgery に留学をしています。Philadelphia は New York, Washington D.C. とともに車で約 2-3 時間の距離にあり、近郊を含めると人口約 580 万人、アメリカで 5 番目に大きな都市です。また Philadelphia は 合衆国の初代首都であり、アメリカ独立の歴史を色濃く残す観光の街でもあります。Phillies (Baseball), Eagles (Football), 76ers (Basketball), Flyers (Ice Hockey) と 4 大スポーツがそろっており、なかでも Phillies は昨年もナショナルリーグを制し、ワールドシリーズに出場しました。昨年度は残念な結果に終わりましたが、相手チームのヤンキースには松井選手がいましたので、私は Phillies を応援した数少ない日本人なのではないでしょうか。

留学先の Thomas Jefferson University (TJU) はフィラデルフィアを中心街にあります。外部から独立した独自のキャンパスはなく、街中に立っているいくつかのビルの集合で構成されています。TJU は 1824 年に設立された Thomas Jefferson Medical College が前身で、全米の中でも最も歴史の古い医科大学の一つです。College of Graduate Studies と College of Health Profession の設立に伴い Thomas Jefferson University に名称が変更されました。

私の所属する Division of Orthopaedic Research は Maurizio Pacifici 教授を筆頭に Faculty、Pos-Doc、Technician、Student 等、総勢 20 名で構成されています。このうち約半数が日本人という非常に特殊なラボです。ここで私は現在、異所性骨化の発生機序の解明と治療法の開発に従事しています。異所性骨化とは本来、骨組織が存在しない部位に発生する骨化であり、主に大関節手術後や重度の熱傷、脊髄頭部損傷、骨折後に発症します。異所性骨化は発症初期において腫脹、疼痛を生じ、終期には可動制限や形態異常を伴うことで罹患者の QOL を下げることが知られています。また 2007 年 3 月に難病（特定疾患）指定された進行性骨化性線維異形成症（Fibrodysplasia Ossificans Progressiva: FOP）は、小児期から全身の骨格筋や筋膜、腱、靱帯などの線維性組織が進行性に骨化する疾患であり、胸郭の軟部組織や咀嚼筋にも可動性の低下や骨化を生じ、その結果、拘束性呼吸障害、開口障害につながる難治性の疾患です。これら異所性骨化の病態はいまだ不明な点が多く、治療法の確立が早急に求められています。この異所性骨化に対する内科的な治療法を確立するために、間葉系細胞の軟骨分化を抑制することが古くから知られているレチノイドを用いて、研究を進めています。大学院時代は一貫して骨再生の研究をしてきましたので、今まで行ってきた研究テーマと現在の異所性骨化抑制の研究は一見、正反対のように思えますが、異所性骨の形成抑制メカニズムと骨再生メカニズムは表裏一体であるため学ぶことも多く、新鮮な毎日を送っています。

こちらに来た当初はまだ 3 ヶ月だった息子も今では 2 歳半になり、かわいい盛りです。家族もこちらの生活に慣れ、平穩にアメリカ生活を楽しんでいます。今となっては笑えるような多くの失敗やトラブルを経験しましたが、書くときききれないため、土産話にとっておきます。留学生活を通して、改めて日本のすばらしさ、アメリカの偉大さを感じています。また、留学に来ることで、多くのことを経験することができて本当に良かったと思っています。このような機会を与えてくださった、岡山大学歯学部先輩方に感謝するとともに、後輩の先生にも留学のチャンスが巡ってくるよう、また、自分自

身に悔いが残らぬよう、残りの留学生生活を精一杯頑張りたいと思います。



Philadelphia の町並み

「colorful life」

Ani Ratnasari

口腔・顎・顔面機能再生制御学講座
咬合・有床義歯補綴学分野



I am Ani from Indonesia. Indonesia is a country in Southeast Asia with the largest archipelago in the world consist about 17.000 islands. It' s located along equator and has tropical climate.

There is one proverb in my country: "*Wherever ground is stood on, the sky is hold high*". It' s mean that wherever we live, we must observe the local custom. I keep my mind open to new ways of doing and thinking about things. Notice things that are the same and things that are different.

Appreciating that variety is what makes me so interesting.

The best method to know Japanese culture and custom began by studying the Japanese. Language. Fortunately I have a good Japanese teacher and friends who always encourage my Japanese ability.

As a Muslim I never face any problems in performing my religious here. I can do daily pray in university. The university respect religious freedom so I can wear Islamic custom in all study activity.

In daily university life, I have a very positive experience, a nice and dynamic environment based on the principles of kindness and cooperation. An inspiring support from my supervisor, Professor Minagi Shogo, helps me to build an academic and research life throughout my study period here. I am really grateful to him give me a chance to do clinical observation in university hospital. This is a valuable experience and makes me more understand about management for temporomandibular disorders (TMD) in Japan. Thanks to all member of department Occlusal and Oral Rehabilitation for their kindness whenever necessary. Finally, I would like to thank the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) for granting the scholarship.

「“Foreign student” at Okayama University」

Hara, Emilio Satoshi

Department of Oral Rehabilitation and Regenerative Medicine

My Japanese traces absolutely do not show my cultural background. Son of Japanese, but born in Brazil (land of samba, soccer and the Amazon forest); I can easily be seen as a Japanese (if I do not speak), however one single word is enough to “unmask” myself. This “wrong” first-impression has been the cause for several embarrassing but hilarious situations. One memorable event that happened during the one-and-a-half years of my first stay in Okayama University onward October 2003, was my first futsal play at the shikata campus gym. Many undergraduate students came by a rumor that “a Brazilian will play at the gym!”, expecting to watch some kind of “Pele”, “Zico” or “Ronaldo”. Unfortunately and to everyone’s disappointment, they could only see a tiny, Japanese-looking and somehow unskillful Brazilian.

During those unforgettable 18 months, the research student program allowed me a tremendous knowledge improvement in research designing and implementation, together with a deeper insight into the Japanese society, culture and costumes. Living at the international dormitory also enabled unique cultural exchanging experiences with people from all around the globe.

Subsequently, the following four years (2005–2009) in Brazil were dedicated mainly to clinical practice and some research attempts at my career-launching Faculty of Dentistry of University of Sao Paulo. Although the studies done in Brazil did not culminated in substantial achievements, daily clinical practice and supervision of undergraduates enabled marked character and personality development and a critical view of clinical researches pillared on evidence-based dentistry.

In April of this year (2009), I was again thankfully granted by the Ministry of Education as a Japanese-government-supported scholar. And in last October, I did in fact enter the PhD course with a terrific support from all staff members and particularly from the ever-enthusiastic-and-warmhearted Professor Kuboki of Department of Oral Rehabilitation and Regenerative Medicine, to those I am always grateful.

Within these “relatively short” upcoming four years, I am decided to devote a great deal of time to basic studies (thanks to the full-time researcher condition) in order to achieve an international researcher level, and to establish friendly connections for future inter-personal contacts and collaborations.

「岡山歯学会 優秀論文賞受賞に対する感謝」

岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 インプラント再生補綴学分野
松香芳三

このたびは栄誉ある岡山歯学会優秀論文賞に選考して頂き、関係の先生方に大変感謝しております。今回の受賞は私にとりまして、いくつかの点で大変意義深いものであります。まず、ズバ抜けた研究を持っておらず、これまで学会賞とはおよそ無縁でありました私が受賞することができたことです。周囲の若い先生方は学会賞を次々と受賞され、それを羨望の眼差しで見ている私がやっと受賞できたと安堵しております。幸いなことに岡山歯学会優秀論文賞は一つのズバ抜けた研究に対する賞ではなく、これまでの研究成果を総合的に評価して頂けるシステムになっております。そのため、私でも受賞することが可能であったのではないかと考えております。ありがとうございます。

次に、受賞論文そのものが長年にわたる結果であり、難産の末の発表であったことも私には大きなことです。受賞論文は Matsuka Y et al. Altered ATP release and metabolism in dorsal root ganglia of neuropathic rats. *Molecular Pain*, 4: 66-78, 2008 ですが、この研究は 2000 年に私が UCLA に留学した時にスタートした研究であります。最初の結果は早い時期に出たのですが、その背景を解明する段階で座礁しておりました。追加実験は UCLA の学生、日本から UCLA への留学生、岡山大学の ODAFUS 学生と多民族の方々によって行って頂きました。受賞論文完成までに多くの歳月が流れた結果、関連論文がいくつか出版されたことも今回の受賞につながったと考えます。また、多くの歳月が流れることにより、財産と形容すべき多くの共同研究者と知り合うこともできました。世の中一体何が幸いするのかわからないものです。臨床系の教室単独で、研究を遂行するには限界があることを痛感しておりますので、今後も多くの共同研究者の方々と進めさせて頂くことを希望しております。

受賞論文内容に関して簡単に触れますと、三叉神経節などの知覚神経節内には神経シナプスは存在しないのですが、神経伝達物質が神経節細胞体から遊離する可能性を我々の研究グループは報告してきました。今回の受賞論文においては末梢神経障害性疼痛において、知覚神経節細胞から神経伝達物質であるアデノシン 3 リン酸 (ATP) の遊離が増加すること、遊離後は分解された ATP はアデノシンになり、次段階での遊離を抑制すること、ATP は代謝関連物質でもあり、神経障害性疼痛に代謝が関係していることなどが理解できました。すなわち、慢性疼痛患者においては末梢知覚神経節での代謝が向上しており、代謝の向上により細胞体からの遊離が増加した ATP が他の細胞への疼痛シグナルを伝達するが、同時にアデノシンに分解されることにより、疼痛制御にも働く可能性が示唆されたのです。疼痛伝達の末梢メカニズムの深淵に触れることができそうな予感がしております。今後は疼痛メカニズム解明とともに慢性疼痛制御に関しても研究することを希望しております。

最後に本受賞におきまして、これまで研究を御指導頂きました UCLA 歯学部の Dr. Igor Spigelman、岡山大学大学院医歯薬学総合研究科の窪木拓男先生、小熊恵二先生をはじめ、多くの先生方に深謝致します。

「岡山歯学会奨励論文賞（臨床論文）を受賞して」

歯周科
曾我 賢彦

この度、以下の論文で、平成 20 年度岡山歯学会奨励論文賞（臨床論文）を受賞する栄誉をいただきました。

Soga Y, Yamasuji Y, Kudo C, Matsuura-Yoshimoto K, Yamabe K, Sugiura Y, Maeda Y, Ishimaru F, Tanimoto M, Nishimura F, Takashiba S. Febrile neutropenia and periodontitis: lessons from a case periodontal treatment in the intervals between chemotherapy cycles for leukemia reduced febrile neutropenia. *Support Care Cancer*. 2009 May;17(5):581-7. Epub 2008 Nov 18.

白血病治療では、原疾患自体が易感染性を引き起こすとともに、抗がん剤等の治療に伴い、正常白血球がさらに一時的に減少し、治療期間中、白血球数がゼロとなる究極の易感染状態が起こります。したがって、腫瘍の治療のみならず、感染管理が白血病治療における大きな課題となります。本受賞論文は、歯周病による感染が、こういった易感染期の発熱（好中球減少性発熱：febrile neutropenia）に関与し、歯周病治療がその発熱を減少させることを示した症例研究です。

この論文は、岡山大学病院歯周科と血液・腫瘍内科とのチーム医療で経験した症例からなされた臨床研究です。雑誌名からお察しいただけるかと思いますが、歯科の雑誌ではなく、がん関連の雑誌に掲載することができました。これは、研究内容を医師から見ても遜色ないものとするため、チーム医療の中で培った内科医師との良好な関係のもと、全面的な協力

Y. Soga · C. Kudo · K. Matsuura-Yoshimoto · K. Yamabe ·
Y. Sugiura · F. Nishimura · S. Takashiba (✉)
Department of Pathophysiology-Periodontal Science,
Okayama University Graduate School of Medicine,
Dentistry and Pharmaceutical Sciences,
2-5-1 Shikata-cho,
Okayama 700-8525, Japan

を得て、本論文を完成させた結果と思っています。事実、右に示すように、この論文は私の所属する歯周科と血液内科との共著論文です。受賞にあたり、歯周科はもとより、論文の作成のみならず、日常のチーム医療でお世話になっているスタッフの皆様には、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

Y. Yamasuji · Y. Maeda · F. Ishimaru · M. Tanimoto
Department of Hematology, Oncology and Respiratory Medicine,
Okayama University Graduate School of Medicine,
Dentistry and Pharmaceutical Sciences,
Okayama, Japan

正直申し上げて、この論文でこのような栄誉ある賞を受賞するとは思っていませんでした。しかし、報道等で取り上げられ、あるいは全国の血液内科を擁する病院から講演依頼を受けるきっかけともなっています。医科歯科連携を推し進めるにあたっての根拠が求められている昨今ですが、多少なりとも、実際に医療に一石を投じることができたのかなと受賞というご褒美をいただけて感じている昨今です。

血液内科とのこのような医療連携の下、私が発信した論文は、この論文を含めすでに 6 報となりました。今年はこれら論文が *Support Care Cancer* 誌の親学会の一つの Immediate Past President の目に留まることになり、日本学術振興会の援助のもと海外研究者交流派遣事業の派遣研究者に内定しています。

岡山で培った医療に関する研究を、日本のみならず、海外にも発信し、さらにグローバルに医療に一石を投げ続けられればと思っています。

「英語論文執筆という名の壁」

ルーベン・カトリック大学
峯 篤史

この度、岡山歯学会より奨励論文賞を頂くことになり、大変光栄に感じております。受賞論文 (Mine A, De Munck J, Van Landuyt KL, Poitevin A, Kuboki T, Yoshida Y, Suzuki K, Lambrechts P, Van Meerbeek B. Bonding effectiveness and interfacial characterization of a HEMA/TEGDMA-free three-step etch&rinse adhesive. J Dent. 2008;36:767-773.) は留学生活において、実験計画から学会発表までを含めた全過程で苦楽を感じたものです。本論文で目標に掲げていた本賞を頂けることを、この上なく幸せに感じております。今後、論文内容に関してご説明できる機会があることを信じて、ここでは「英語論文執筆という名の壁」という題でしたためたいと思います。

英語論文執筆、これは僕にとって大きな壁でした。大学院卒業後、窪木教授からその壁を乗り越えるために「毎日英語論文を読む」、「まず、執筆論文のワードファイルを開ける」という教えを受けていましたが、PC の前で論文の要約だけを読んで励んでいる気分になっていた僕には、その教えの本質が分かっていませんでした。その後、留学生活で論文をじっくり読む時間を持つことができるようになり、「この表現カッコイイ!!」「話の流れが最高!!」「これ本当?」と感じながら論文サーフィンするようになり、気になった部分・気に入った部分をパタパタとタイピングしていくようになりました。そして、あの教えは「まず論文、特に緒言と考察をしっかりと読むこと、そして良いと思った部分を残すこと」だったのだと気がきました。

教育学者・齋藤孝氏は著書「読み上手 書き上手」の中で“読み上手”になるための具体例をいくつか挙げています。例えば【本を読む時間がないという人は、改まって「読書の時間」を設定しようと考えから難しいのです。(中略)私の場合は、乗馬マシンのような健康ダイエットマシンに乗りながら、テレビを見て、読書するのが、ちょうどいいリズムになります。(P31-2)】や、お金を払って場所と時間を買うという【喫茶店タクティクス (P177)】で、後者が僕の場合に近いと考えられます。ちなみに、齋藤氏は“書き上手”に関して、【私は論文や本を書くときに、どうしてもこれは必要だという引用部分をまず打ち込むことにしています。それを打ち込んでおくと、原稿の何分の一かは確実に埋まっていきますから、それだけでずいぶん気が楽になります。(P52)】と記しています。

確かに、忙しい日々の中でこれらを実行することは困難です。しかしながら、「時間管理の第一人者」と賞賛されている Lothar J. Seiwert 氏は、「仕事を“緊急性”と“重要度”の2軸で高低をつけた場合、“緊急性・中～低”で“重要度・高”こそが大切。」と提言しています (<http://www.seiwert.de/>)。論文作成は、基本的に追われるべき切がない“緊急性・中～低”の作業です。帰国後、僕は忙しい日々の中で再び大きな壁と向かい合うことになるでしょう。「心を鬼にして、自分を磨く時間をつくる」。これも窪木教授の教えです。今回の受賞を励みにして、臆することなくこの壁に挑みたいと決意しております。

「岡山歯学会 奨励論文賞を受賞して」

口腔外科（病態系）

伊原木聰一郎

この度は、名誉ある岡山歯学会 奨励論文賞を頂くことができ大変光栄に存じます。また、御推薦下さった佐々木 朗教授に感謝しております。受賞論文は、Ibaragi S et al : Neamine inhibits prostate cancer growth by suppressing angiogenin-mediated rRNA transcription. Clin Cancer Res. 15(6):1981-8. 2009 です。

Angiogenin (ANG) は HT-29 ヒト結腸癌細胞株の培養上清から単離された血管新生因子です。癌細胞の産生する ANG は、血管内皮細胞に作用し血管新生に重要な役割を果たします。ANG は細胞表面の受容体に結合すると核に移行します。核内の ANG はリボソーム DNA (rDNA) のプロモーター領域に結合し、rDNA の転写を促進させます。rDNA の転写は細胞の増殖を亢進させます。

最近われわれは、ANG が血管内皮細胞だけでなく、癌細胞の rRNA の転写も促進させることを発見しました。つまり ANG は、血管新生を介さずに直接的に、癌細胞の増殖を促進します。したがって、ANG を阻害すれば腫瘍血管新生と癌細胞増殖を同時に抑制できる可能性があります。

本論文では、アミノグリコシド系抗菌薬である Neomycin の分解産物である Neamine が、ANG の促進する rRNA の転写を抑制し、腫瘍血管新生と癌細胞増殖を阻害することを明らかにしました。将来的には、Neamine を用い ANG を分子標的とした癌治療への応用を考えています。今後は今回の受賞を励みにし、尚一層努力してまいりたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

「創造力豊かな医療人を育成する卒後臨床研修センターを目指して」

卒後臨床研修センター歯科研修部門 副部門長
総合歯科 副科長 白井 肇

平成 21 年 11 月に「卒後臨床研修センター歯科研修部門」の部屋（専任教員ならびに歯科研修医の居室）が、1F（旧歯学部附属病院調理場）から 2F（旧歯学部事務室）へと引っ越しました。旧研修センター室は、平成 15 年度に 3 名の専任指導医と 20 余名の歯科研修医の居室としてスタートしましたが、その後、専任指導医も歯科研修医も増加し、現在では一人当たり約 1m² 程度しかない手狭な状態になっており、増室または移転が望まれていました。

新しい部屋は、旧研修センター室に比較して、約 2 倍の床面積の大きな窓がある明るい部屋で、「今日はポカポカとしているなあ」「雨が降ってきたなあ」「急に暗くなってきたなあ」とかいった日々の天気の状態や朝夕を感じることもできる部屋です。このような快適な環境の部屋への移動が実現できたことは、粘り強く研修環境の向上を訴えて下さった卒後臨床研修センター歯科研修部門長の鳥井教授と佐々木副病院長を始めとする岡山大学病院歯系各診療科科長の先生方の研修環境充実に対するご理解とご協力のお陰だと思って大変感謝しております。

新しい部屋の設計にあたり、これまでの旧センター室に不足していた①豊かな人間性の涵養を図るための明るい開放的空間の提供（極めて閉鎖的空間でした）②自己学習能力を育てる環境の整備（センター内に個人のスペースを持つことはとても無理でした）をコンセプトにさせて頂きました。勿論、これまで他大学からの来訪者が羨ましがる専任指導医教員室をセンター内に設置したことによる常時研修医が指導医に気軽に相談できる環境は全く変えておりません。各診療科の指導医の先生方も、是非新しくなった開放的な環境のセンター室に一度いらしてください。お待ちしております。

岡山大学病院の理念・基本方針には“創造力豊かな医療人の育成”が謳われ、卒後臨床研修センターがこの項目を担う最重要なセクションであるという認識でいます。私がこの基本方針に基づき、卒直後臨床研修において最も重要であると考えているのは、教員側の意識改革と居住環境の整備です。前者においては、過去の卒直後の研修がそうであったような、虐げられた環境で医療人を育成し続けると、後輩にも、卒直後は自分と同じ環境下での苦労を強いる悪循環のサイクルができあがってしまいます。そのような環境では、これからの医療に最も必要とされている温かい人間関係の構築や連帯しながら医療活動に従事する能力は、その人の生まれ育った環境や個人の能力に依存してしまっていて、なかなか育ちません。これまで以上の創造力豊かな医療人を平均的に育成するためには、この悪循環のサイクルを断ち切り、我々教える側の意識改革が必要なのです。そして後者においては、人間の生涯学習能力は物理的、社会的な外的刺激とこれに対する個人の対処能力との相互関係で決定されると考えられています。まず、図書や冷暖房の整備といった自己学習を支援する場としての環境提供がなされなければ、個人に余程の強い意志でもない限り、生涯学習の礎は育まれるものではありません。我々は、研修医を篩にかけるのではなく、卒直後に科学的な思考能力を育む第一歩を誰もが楽に踏み出せるしっかりとした学習環境を整備することが、我々の使命であると考えています。そして、岡山大学で研修した全ての研修医が、温かみのある創造力豊かな医療人として育っていくことを願ってやみません。

とはいいいましても、卒直後の臨床研修は、臨床系各診療科の指導医の先生方のご協力なしには成り立つものではありません。これからも他大学より抜きにでた Only One の研修センターを目指して頑張っていく所存ですので、卒後臨床研修センター歯科研修部門に対する皆様の御協力の程よろしくお願い致します。

【移転した新研修センター室にて】



「スウェーデン歯科医療現場を訪問して」

大学院医歯薬学総合研究科 機能再生・再建科学専攻 インプラント再生補綴学分野
臨床専門医コース（大学院一年） 丸濱 功太郎



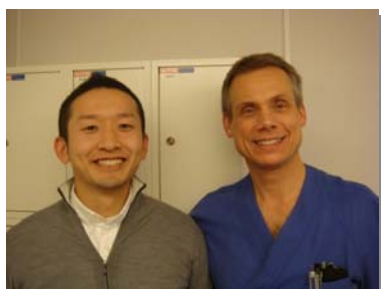
私は 2009 年 11 月 29 日から約一ヵ月間、スウェーデン王国第二の都市イエテボリへ、平成 21 年度 特別教育研究経費「口腔から QOL 向上を目指す連携研究」に関連した「短期派遣事業」にて訪問してきました。研修内容はイエテボリ市内にある Personal Clinic、そしてイエテボリ大学付属病院の一つである Molndal Hospital にて、主に臨床見学を行ってきました。

スウェーデンは、フィンランド・ノルウェーと同じ北欧国の一つで、世界中でも社会保障制度が整っている国として有名であり、高齢者福祉などの社会政策は世界でも注目を浴びています。

ここでは、18 歳未満の歯科治療（インプラント・矯正治療含め）はすべて無料、18 歳を超えると歯科治療費の助成制度があり、検査と予防処置のために使用されています。また、1 年間の治療費に上限があり、それを超えると高額治療費の助成対象として超えた部分の 50～85%を助成してもらえる制度などもあるようです。

しかし、このようにスウェーデンには充実した社会保障制度がある一方、消費税（一般に 25%）をはじめとする税金はかなり高く設定されています。このような状況が全て日本で受け入れられるとは到底思えません。今後更に少子高齢化・人口減少が進むこの日本において、社会福祉政策をどのように進めていくべきなのか、など多くのことを考えさせられる良い機会にもなりました。

このような貴重な機会をいただいたことを感謝するとともに、これから自らも社会へ、そして世界へ何か発信し貢献できるよう日々精進したいと思います。



「研究室配属」

岡山大学歯学部歯学科3年
堀 節代

私は、3年次の10～11月に行われる自由研究演習で、同級生2人とともに咬合・有床義歯補綴学分野に配属され、研究に参加させていただきました。

岡山大学歯学部のカリキュラムでは、2年～3年にて基礎系の教科を履修し、補綴学など臨床系の講義および実習は4年前期から始まることとなっています。補綴学に関する知識のまだ浅い私にとっては、実際の診療や義歯作成といったイメージの強い科でした。咬合・顎関節症など、歯科の花形ともいえる分野ではどのような研究がおこなわれているのか以前より興味を持っていたので、ひそかに楽しみにしていました。

皆木教授、川上先生のご指導のもとで着手した研究は「顎運動が全身の姿勢に与える影響の考察」でした。顎口腔系に異常をもつ患者に治療を行った場合、治療前後でどのように姿勢の変化が現れるのか、バイアスを排して測る方法はないだろうか…という目的にて実験を行いました。本学歯学部の学生および大学院生に下顎安静位、最大開口位および右側偏心位をとらせた時の、頭部・肩部・脊椎の角度変化をみることによって姿勢変化を評価しました。その結果、最大開口時は頭部が後屈すること、右側偏心時は頭部が逆側である左側に回旋することが分かりました。そして、最も興味深い結果は、最大開口位および右側偏心位両方において、体幹も左側に回旋するということでした。その根拠は現時点では推測する他ありませんが、咀嚼筋と頸筋の相互作用、習慣性などではないかという結論に至りました。

この研究は論文などでもまだ取り上げられていないテーマ（教授によれば、「遊びから生まれた研究」）であるので、方向性が見えず手探りの状態でした。研究期間も2カ月と短かったのもありました。ひとつでも傾向を見つけたい一方で予測がたてづらいという不安の中で、予備実験、データ解析に追われてはああでもない、こうでもないと皆でそれこそ頭をひねっていた毎日でした。だからこそ、思いもよらず良い結果が出て驚くとともに、本当にうれしく、やりがいを感じました。

ふだん私は、決められた時間割の言うとおりに講義を聴き、実習をこなし、試験があるからそれを受けます。しかしそんな受身の態度では研究はできません。データはパソコンが処理してくれますが、解析法を選択するのは私たちです。少しでも正確に撮影する方法を、その場のありあわせの道具の中で考えたり、数をこなしながら実験の手順を改良していったり、と積極的に取り組む活動は大学で初めてで、その過程も楽しかったです。これまでの日常がいかに受身で主体性に欠けるものであったか、今さらながら痛感しました。

私は、研究室配属を通して実際の研究の一端に触れることができ、非常に有意義な2ヶ月間を過ごすことができました。まだ学生生活も折り返し地点で卒後のビジョンは全く見えませんが、ぜひ診療のみならず研究にもかかわりたいと思っております。また、明日からの講義や実習を受ける際の自分の姿勢をも見直す良い機会になりました。研究にあたって丁寧にご指導してくださった皆木教授、川上先生をはじめ、実験に協力してくださった咬合・有床義歯補綴学分野の先生方ほんとうにありがとうございました。

「歯科衛生士室の活動報告」

歯科衛生士室
羽川操

岡山大学病院は、患者への包括的・継続的なサービス環境を医療・保健・福祉の点から総合的に取り組んでいくために、平成 15 年より総合患者支援センターが院内措置として設置されました。歯科衛生士室は、この総合患者支援センターを通してチーム医療に参加するようになり、現在では主に、口腔ケアを中心に各チームで活動をおこなっています。

また、チーム医療の他にも妊婦対象の母親教室・小児科での歯磨き教室を行っています。

主にかかわっているチーム医療は、

- ・ NST

嚥下障害・咀嚼・栄養障害等の患者に対する、栄養補給方法等について検討し、栄養管理をチーム医療として提供する。

- ・ じょくそうクリニック

低栄養患者に対して、経口摂取に移行できるよう口腔ケア等を通じて活動している。

日常生活自立度が低下している患者への口腔ケアの手助けを行っている。

- ・ ICU 口腔ケア

ICU 入院患者に対して、上気道感染を防止する・口腔内の状態を清潔に保つことで患者の QOL の向上を目指している。

- ・ 頭頸部癌

頭頸部癌の患者の治療は、手術・化学療法・放射線療法があり、口腔粘膜炎などの口腔合併症高率に発症する。その為、治療開始前・治療中・手術後に口腔ケアを行い、口腔細菌量をできるだけ抑え、口腔合併症を予防・軽減し QOL の向上に努めている。

- ・ 周術期管理センター

PERIO は組織横断的に業務を行い、大学病院で手術を受ける患者に対して、快適で、安全・安心な手術と周術期環境を効果的に提供する。その中で、歯科衛生士は術前の口腔ケアを担当しています。

またそれ以外にも、医病入院患者への口腔ケアの往診を行っています。歯科衛生士は主に、摂食・嚥下の機能低下している患者には、口腔機能訓練を取り入れての口腔ケア・病気との関連性を交えての口腔ケア・次のステップアップの足がかりになるための口腔ケアと幅広い口腔ケアに取り組んでいます。

実際に行っている現場を受託実習生に見学させることで、病院で勤務する歯科衛生士の姿から、歯科衛生士の活躍の幅の広さを感じ取ってもらっています。

これから、益々歯科衛生士の活躍の場が広がり必要とされるように、歯科衛生士一人一人が自己研鑽を積んで結果を出していきたいと考えています。



「過去 10 年間の技工室を振り返って」
manufacture, coordinate and management への道

歯科技工室
 竹内哲男

岡山大学病院診療支援施設技工室の業務は、開設からの歯科技工物製作のみに集中することしかできない時代を経て、約 10 年前頃から歯科大学附属病院の技工室という特色が少しずつ現れてきた。その特色とは、それまで歯科医師と歯科技工士が担っていた歯科技工物（以下、技工物）製作に関わる業務の大半を技工室に一括集中させ管理することにより、業務効率を高める手法である。以来、技工室への技工物製作依頼受付（以下、受付）件数は毎年増加し続けた。また、業務内容も、外来診療分野の歯科専門外来（口腔インプラント、顎関節症・口腔顔面痛み、審美歯科、顎顔面補綴など）の開設をきっかけに、歯科技工士の専門知識や技術を生かしてチーム医療に貢献・支援することの重要性が益々高くなっていった。

平成 12 年は、予測される法人化問題、とりわけその時点での歯科技工士の非常勤職員の処遇を巡り、事務方と激しく論争して「病院における歯科技工業務のあり方」などを深く考えさせられた。このことが契機になったとも思えないが、翌、平成 13 年には、業務管理や業務遂行を円滑に行うため、病院長発令の技工士長と部門主任（2 名）体制となった。

また、受付の確実性や受付業務効率を高めるため、技工室内に新規の受付カウンターを設置し、セントラルバキュームを備えた印象材消毒コーナーや石膏注入コーナーを配置しパーティションを施した総合技工受付スペースを確保した。これにより増加が加速する受付件数に対応可能となり、消毒臭気や石膏粉塵量減少対策にも成功して技工室の環境改善にもなった。さらに平成 15 年には、新規導入される病院情報システム化に対応するため受付カウンターの拡大および保存・補綴診療室への導線を変更してハード面の充実がほぼ整った。

しかしながら総人数 8 名の歯科技工士で行ってきた歯科技工業務は、歯学部附属病院（以下、歯病）と医学部附属病院（以下、医病）の統合を理由に非常勤歯科技工士の 2 名が削減され、それに伴う受付業務を含め技工物製作業務以外の業務量が残された常勤歯科技工士（6 名）に重くのしかかってきた。

同年、歯病と医病が統合され、歯科技工士も医療技術部に配置統合となり、歯病自体も医病との連携促進を目指した。その先駆けとして NST チームの一員となる。現在では RP などの CAD・CAM デジタル技術を応用して口腔外科のみならず口腔外科・耳鼻咽喉科・形成外科の歯科・医科連携（頭頸部癌チーム）治療や整形外科、脳神経外科治療に連携支援している。

また、臨床における医・歯学の研究の推進と医療人の育成を図るため、平成 13 年から行ってきた歯科衛生士受託実習生の技工室見学研修受入に加え、平成 16 年から歯科技工士の卒後研修制度を開始し現在に至っている。

今後も当技工室は、総合的な医療機能を生かして良質な医療を提供する岡山大学病院の各診療部門に対し、歯科技工士の「生きたモノ作り」における専門知識や技術を駆使してチーム医療に貢献し、医療現場で必要とされるマネジメント力を有する大学に職務する「ホスピタルテクニシャン」・「総合病院技工室」として発展させていく所存です。今後とも、ご指導ご支援を宜しくお願い致します。

「岡山大学病院 NST 活動について」

補綴科（クラウンブリッジ）

縄稚久美子



医療を行う重要な基盤として栄養管理があります。栄養管理がおろそかになると除脂肪体重が減少し、生命を維持することが難しくなります。どんな良い治療も効果が上がりません。口腔のトラブルは栄養不良に直結しますので、口腔環境・機能の保持は栄養管理にとって必須のチェック項目であり、その経口摂取状況に応じてサポートの仕方が違ってきます。そのような流れを受けて、岡山大学病院栄養サポートチーム（NST）は活動を開始しました。歯学部が併設されているということから補綴科（皆木、峯、縄稚）、歯科衛生士室（住吉、大塚）、摂食・嚥下リハビリテーション外来（村田、有岡）といった歯科との積極的な連携が特徴で、チームメンバーは、医師、歯科医師、薬剤師、看護師、管理栄養士、歯科衛生士、歯科技工士、理学療法士、臨床検査技師といった多職種からなります。毎週水曜日のミーティングで検討を行い、推奨される栄養プランと実際のアセスメント、問題点、解決案の提示を行い、回診による状況の確認、経過観察を行っています。周術期の栄養管理も含め超急性期病院独特の難症例を扱うことが多く、本当に他職種にわたり意見を出しあわないと解決できません。歯科の私にはわからない事もまだまだたくさんありますが、チームの一員として、患者様の力になれる幸せを日々感じながら活動しています。

このような活動を認められて、岡山大学病院は平成 18 年度より NST 専門療法士認定教育施設に認定され、研修プログラムを立ち上げました。数ある認定教育施設のうちでも、受け入れ定員が 60 名超という大規模な施設は全国的に珍しく、県内だけでなく全国からの受講希望があります。40 時間のプログラムの中に歯科の講義も 4 時間ほどとられていて、口腔ケアの相互実習も行っています。選択制ですが摂食・嚥下リハビリテーション外来の V



E, V Fを見学するコース, 歯科医師, 歯科衛生士の往診を見学するコースも設けており好評です。県内のNST や摂食・嚥下リハビリテーション, 口腔ケア等の知識や技術のレベルアップを図り, 医療連携の充実につながればと思いますながら看護師, 薬剤師, 検査技師の方々とディスカッションを行います, 実際の医療現場の厳しさなど多くの問題と立ち向かう彼らの姿にこちらが教えられることや勇気づけられることもしばしばです。関わりはじめて5年以上になりますが, まだまだ学ぶことが多く, 日々患者さんの状態に一喜一憂する毎日は本当に医局生活を充実したものにしてくれました。

2010 年4月から2年間海外赴任となりましたため, 同期の峯に引き継ぎます。病院内でも異動の時期で4月からまた新体制になると思いますが, 患者さん中心のアットホームなチームには変わりはないので, 興味があるかたがおられましたら引き続き, 峯に声をかけていただけたらと思います。どうぞよろしくお願い致します。



編集後記

皆様のご協力を得て今年も歯学便りを発行することができました。投稿のお願いを快く引き受けてくださいました先生方に厚く御礼申し上げます。私自身過去の歯学便りに載せていただいた経験がありますが、文章の苦手な身としましてはなかなか苦労して書いた記憶があります。編集者の立場になってみますと日々の業務に忙殺されるなか先生方へ寄稿をお願いするのは申し訳なく思う気持ちがございましたが、皆様に快く引き受けていただき大変感激しました。そして皆様の原稿をあわせてみますと各領域の個性があり、岡山大学歯学部はまさにスペシャリストの集団であると改めて認識いたしました。また先生方の仕事に取り組む姿勢に感化され、仕事への活力を頂きました。

繰り返しになりますが、大変お忙しいところご協力いただきました先生方にお礼を申し上げます。

編集 洲脇道弘



歯系広報専門部会

部会長	窪木 拓男
総合歯科（歯科研修部門）	白井 肇
むし歯科	神農 泰生
歯周科	谷本 一郎
補綴科（クラウンブリッジ）	水口 一
補綴科（咬合・義歯）	洲脇 道弘
口腔外科（再建系）	水川 展吉
口腔外科（病態系）	岸本 晃司
歯科放射線科	此内 浩信
予防歯科	江國 大輔
小児歯科	假谷 直之
矯正歯科	本城 正
特殊歯科総合治療部	森 貴幸
歯科衛生士室	高橋 明子
技工部	神 桂二
医療情報部（歯系）	小河 達之